

バルカン地域研究の新展開

—民族文化の越境・接触・変化をめぐる多角的研究を目指して—

【プログラム】

□ 第一部基調講演「日本のバルカン地域研究の礎」

- ・ 柴宜弘(城西国際大学特任教授)「日本におけるバルカン地域研究の発展と展望」
- ・ 三谷恵子(東京大学大学院人文社会系研究科教授)「V. ボギシッチの事績に見るバルカン地域研究の可能性」
- ・ 鐸木道剛(東北学院大学文学部総合人文学科教授)「セルビア近代アイコンからバルカン地域研究へ」

□ 第二部研究報告

第一セクション「バルカン地域研究の新展開—理論と実践—」

- ・ 鈴木健太(東外大)「21世紀における「バルカン」—地域をめぐる概念と認識」
- ・ 門間卓也(東大院)「戦間期クロアチア・ナショナリズムのバルカン概念を巡る政治性」
- ・ 上畑史(学振PD/国立民族博物館)「セルビアのターボフォーク/ポップフォーク：多元主義の実践としての音楽、文化、その変容」
- ・ 村上亮(学振PD/京大)「ガヴリロ・プリンツィプ像の過去と現在—英雄/テロリストの二分法からの脱却に向けて」

第二セクション「バルカンの民族文化の越境・接触・変化をめぐる諸問題」

- ・ 中澤拓哉(東大院)「変容するニェゴシュ—南スラヴ人地域におけるペタル2世像」
- ・ 岡野要(京大院)「バルカンの特徴の越境—ヴォイヴォディナ・ルシン語における接続詞daの使用をめぐる—」
- ・ 日高翠(学振PD/東京藝大)「中世後期バルカン地域の教会堂壁画—技法と材料」
- ・ 菅井健太(筑波大)「バルカンにおける言語接触と変化—ドナウ川を渡ったブルガリア人移民のことばを中心に」

【開催報告】

本企画は、バルカン地域研究のあり方を問い直し、民族文化の越境・接触・変化の目まぐるしいバルカン半島を研究するための今後の研究者同士の協力体制の構築および分野や専門地域の枠を越えた新たな地域研究の可能性を探ることを主な目的として開催された。

第一部「日本のバルカン地域研究の礎」では日本におけるバルカン研究を支えてきたベテラン研究者3名を招き、今後のバルカン地域研究の展望、そして可能性について講演していただいた。3本の講演は歴史学・言語学/文献学・芸術学を中心にしたものであったが、その枠をも超える視野の広い内容であった。このような視座の取り方は、参加した若手研究者および聴衆にとって学ぶことの多い非常に有益なものであった。

第二部の第一セクション「バルカン地域研究の新展開—理論と実践—」では、地域研究の方法論・視座の取り方を主題にした報告4本が行われた。歴史学・政治学・音楽学にまたがる幅広いテーマではあったが、共通する問題認識・課題も多く、報告者・討論者だけでなく、聴衆からの反応も大きかった。質疑応答では活発な議論が展開され、今後の研究を行う上で非常に興味深い意見が多く聞かれた。

第二セクション「バルカンの民族文化の越境・接触・変化をめぐる諸問題」では、より具体的で個別的な事例を取り上げた報告4本が行われた。このセクションでは言語学・歴史学・保存修復学の分野からの報告があり、多くの参加者がバルカン研究のあまり知られていない一面を垣間見る機会となった。幅広い分野にまたがるセクションでありながらも、討論者からのコメントは各報告を的確にとらえたものであり、報告者が今後の課題について考える貴重な機会となった。

全体を通して、「バルカン」という概念をどのように捉えるか、研究の際にどのように視座を取るか、そして我々日本の研究者と現地の人々との関係をどう構築していくかなど、地域研究では避けて通れない点について意見を交換できた点は非常に有益であった。本企画の成果公表も含め、今後の共同研究についても多くの提案がなされたという点でも、この機会を最大限に活かせたと考えている。